

校長室から (NO. 46)

雪の中の二宮金次郎さん



「これは、いったいなんでしょう？」
答えは、児童玄関前の二宮尊徳（金次郎）さんの銅像です。

冬が近付いてきたとき、小さい学年の子らと寒そうだねと話し合い、どうせ着せるなら交通安全を喚起したいと思って「安全ベスト」を羽織らせました（少し見えますか？）。

ところが、3学期に入り、雪の日が多く、もう一枚「雪の上着」を着てしまい、何がなんだか分からなくなってしまいました。先日も、子供たちと「雪のえりまきだね」と寒そうな二宮像を眺めていました。

さて、子供たちは、二宮金次郎像が学校に立っている理由を知っているのかしら、とふと思いました。機会があれば伝えたいな、とも思いました。

金次郎は1787年に小田原市の裕福な農家に生まれ1856年に70歳で亡くなりました。その間、藩や村の立て直しに多くの業績を残しています。

生まれた頃は裕福でしたが、川の氾濫で田畑を失い、お父さんは金次郎が14歳の時、お母さんは16歳の時なくなりました。そこで叔父さんに預けられるのですが、ある夜 明かりをともして本を読んでいると叔父さんに「お前は誰のおかげで飯を食っているのだ。油がもったいない。」と怒られました。

金次郎は今度は空き地に菜種を植え、出来た菜種と油を交換して本を読むのです。そうやってまで学ぼうとする熱意の象徴として、槓を背負い歩きながら本を読む姿が像となっています。